

---

# 紅凜花奇譚

二木了平

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅凜花奇譚

### 【Nコード】

N3862I

### 【作者名】

二木了平

### 【あらすじ】

幼いころ、僕は不思議な体験をした。それは保健室で起こった、赤い花にまつわる奇妙で暖かくて、そして優しいお話

幼いころに見た風景を思い出していた。

田んぼのあぜ道に咲く、凜とした綺麗な花。

あれはいつだったか。

たぶん、あの景色が、僕にとっての原風景。

だから、僕はこの景色を忘れないでおこう。

僕は昔から病弱な子供だった。

体育の授業中、貧血で倒れることなどはそう珍しいことでもなく、そのたびに僕は保健室のお世話になっていた。そこで僕についたあだ名が『保健室の君』。

……正直言つて、あんまり喜ばしいことではないのだ。

その日も例によつて、体育の授業中にぶつ倒れ、同級生によつて保健室まで運ばれた。僕はその同級生にお礼を言つと、布団の中にもぐりこんだ。

運動場が見える窓際の隅っこが特等席であり、僕の指定席でもある。ほどよく気持ちがいい風が部屋の中へ流れ込んでくる。前髪が幽かに揺れて、一瞬、僕は咄嗟に目を閉じた。

「大丈夫かい？」

突然、その声をかけられた。ふと窓を見ると、一人の男の子がそこに立っていた。

「うん、大丈夫。ただの貧血だから」

「そっか、そう……ならいいんだ」

その男の子は体操服を着ていた。タメ語で話している。たぶん同級生なのだろう。最も、小学生でタメ語も敬語もあったものではないが。

「名前は？」

僕にそうたずねてきた。

「……君塚、冬人」

「そっか。ぼくは　　って言うんだ」

僕はその男の子のことを知らなかった。名前を聞いてもピンとこない。仕方がないか。ここは私立の有名小学校で、一学年に8つもクラスがある。各クラスに約35人在籍しているから、概算で280名もいることになる。見知らぬ同級生がいてもおかしくない。それに僕は、どちらかという友達が少ない、内向的な子供だった。

「先生に頼まれて、君の様子を見に来たんだ。全く、人使いが荒い先生だよ。ちょっとぶらぶらしてただけなのに、勝手に『お前暇だろ』って無理やりここに連れてこられたんだから。　あ、君のお見舞いが嫌だってわけじゃないよ！　ただ、ちゃんと説明してから命令してほしいよね、ってなだけの話で」

よく喋る子だった。内向的な僕とは違って、その子は次から次へと話題を持ちかけてくる。学校の話、家族の話、友人の話、たぶん、その子はなんでも話した。

そうして一人で20分ほど喋った頃。

「……おっと、もうそろそろ行かなくちゃ。少しは元気になった？」

「うん、ありがとう。だいぶ楽になったよ」

「それはよかった」

「また、こうしてお話したいな」

「……そうだね。でも、次は、ここでは駄目だよ？　元気なところで、うん、花が咲いているようなところで」

その子はポケットから一輪の花を僕に手渡した。名前は知らなかったが、赤い、綺麗な花だった。

「あまりにも綺麗だったからさ、勝手に摘んできちゃった。後で説教されるかもしれないけど、まあ大丈夫だろ」

「ぼくはいい子だからね。」

その子はそう言っつて、僕らは笑いあつた。そして。

「じゃあ、次の機会にまた会おう、冬人くん」

そう言つと彼は窓のフレームから姿を消した。……僕は眠たくなつてきたので、そのまま眠ることにした。本当は、その男の子と話している間、ずっと頭痛がしていて、調子が良いとはいえなかつた。でも、僕を心配してくれているのに、そんなこと言えなかつた。

風が吹く。僕は夢の中へと沈んでいった。

「あら、起きたの?」

目をあけると、隣のベッドで保健の先生が本を読んでいた。背表紙は隠れていたので何の本を読んでいるのかはわからなかつたけれど、最近、三国志にはまっているというから、たぶんそれだろう。

「気分はどうか? “保健室の君”」

「先生まで僕をその名で呼びますか」

「別に間違つていないでしょ? 保健室の君塚冬人くん、略して保健室の君」

「名前を丸ごと略されたっ!? もはや誰だかわからない!」

「君のツツコミ、私は大好きよ」

「素直に喜べないっ!」

僕は、確かに内向的であるけど、でも何故か彼女の前ではすごく元気な子になる。

「あら、綺麗な花ね」

先生は窓際に置かれた花を見た。

「あ、それ、お見舞いです」

「お見舞い?」

「ええ。男の子が来て、少しだけ話して、それをくれました」

「……そう、私、鍵かけてたつもりなんだけどね」

鍵をかけていたというが、別に男の子はドアから入ってきたわけじゃない。男の子は窓から

「どうしたの？」

「……いえ、何でもありません」

「そう。ところで、冬人くん、その花の名前知ってる？」

「いいえ。先生が帰ってきたら聞こうと思ってました。なんていうんですか？ この花。見たことはあるんですけど」

「彼岸花」

「え？」

「死人花、幽霊花、剃刀花、狐花、捨子花

。要するに、あ

んまり縁起の良くない花なのよ、それ」

先生は、ぱたんと本を閉じると、立ち上がった。

「一般的に、彼岸に咲く花、と言われているわ。お彼岸の時期に咲く花だというのは、その婉曲の説。彼岸とはすなわちあの世の世界。死後の世界のことよ。それでもよければ花瓶を用意するけど、どうする？」

そう尋ねられて、僕は、お願いします、と答えた。

この小学校は、特殊な立地をしている。ゆるやかな山の傾斜に建てられているため、事実上校舎一階は地下一階に、二階は一階に存在する。だから僕らは二階にある下駄箱を通って外へ行く。でも、増築された新校舎は、二階とはつながっているけれど一階とはつながっていない。つまり、保健室がある新校舎には一階が存在しないのだ。

彼岸花。彼は、どこでそれを摘んできたのか。誰に頼まれて僕のところへ見舞に来たのか。誰に説教される予定なのか。どうやって、地面の存在しない二階の窓から、僕と会話することができたのか。

つまり、彼はすでに死んでいて、僕は幽霊と会話してたんだ。

「結局、彼は僕を連れて行くつもりでいたのでしょうか？」

「あら、わからないの？ 時間外講義はお代を取るわよ」

僕のゼミの教授、至木間空花しきま くつかは、教鞭を取る者として、とんでもないことを要求してきた。

「……今度、ケーキ買って来ます」

そう約束して僕は説明の続きを促した。

「生者せいじゃを彼岸へ導くのは幽霊ではなく死神の役目。あなたの記憶中の彼の言葉を信じるのならば、むしろ、あなたを死神から守ろうとしていたのかもね」

「どういうことですか？」

空花先生は、一呼吸置いてから、話を続けた。

「彼岸花っていうのはね、通行証なのよ。この花を持っていれば、彼らは閻魔様の裁きを受けるまでもなく極楽へ行くことができるの。そうね、これを持てるのは、生前善行を積んだ人間か、病気や事故、災害や厄害によって、若くして死んだ子供くらいかしら」

「若くして死んだ、子供」

「加えて、この花には死神を退ける力もあるの。閻魔様に裁かれないうが故に、彼岸花を持つものが死神に間違つて地獄へ連れて行かれないためにね。君塚くん、あなた、以外とその時、死にそ

うだったんじゃないのかしら？」

そう言われて僕は思い出していた。あの日、僕は貧血で倒れたんじゃないなかった。頭に硬球テットボールを受けて保健室に運ばれていた。そう、彼と話している時、ずっと、異常なほど、頭が痛かったのだ。そんな

僕を見かねて、彼は、僕を助けてくれたのだろう。

「僕に彼岸花を渡してしまって、あの子は、天国に行けたでしょうか？」

僕がそう尋ねると、空花先生は笑って答えた。

「天国じゃなくて極楽よ、君塚くん。まあ、それはいいとして、たぶん大丈夫だったんじゃないかしら。生者に彼岸花を贈るという行為は悪行なのでしょうけど、基本的に閻魔様は生前の行いに審判を下すものなの。あちらでできる悪行なんてたかが知れてるしね。だから多少の説教は受けたかもしれないけれど、きつと無事に逝けたでしょう」

夏も終わって秋彼岸。昼夜の長さが等しいこの日は、閻魔様がよく名判決を下す。それを見るために死神や冥界の住人が数多あまたやってくるという。そして奇しくも、今日は彼と出会ってからちょうど十年目の記念日だった。

せつかくだから、何かお供え物でもしよう。柄じゃないけれど、でも、それで少しは供養になるかもしれないと思ったからだ。

「いいわね。じゃあ、茄子と胡瓜でもお供えしましょうか」

「いや、先生。それはお盆ですよ……」

「いいのいいの。割り箸は刺さないから」

「それじゃあ何の意味もないでしょう」

先生は、抱えたおん箆おんに茄子と胡瓜を盛ると、研究室を出ていく。

今日は月が綺麗だから、たぶん、屋上で月見酒でもするつもりなのだろう。

「君塚く〜ん！ ほら、はやく〜ん！」

そう呼ばれて僕は急いで研究室を後にした。



幼いころに見た風景を思い出していた。

田んぼのあぜ道に咲く、真っ赤な彼岸花。

あれはいつだったか。

たぶん、あの景色が、ぼくにとっての原風景。

きつとこの景色が、いつか、誰かを救う。

だから、ぼくはこの景色を忘れないでおこう。

そう心に誓って。

ぼくは歩く。

夕日の差す、秋の日を唄いながら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3862i/>

---

紅凜花奇譚

2010年10月8日15時02分発行